

西暦	年号	年齢	白井小介事歴
1826	文政9	1	小介生まれる。
1847	弘化4	22	江戸屋敷で正月を迎える。
1851	嘉永4	26	京都遊学許可される。
1853	嘉永6	28	斉藤弥九郎へ入門する。 安積良斎・佐久間象山へ入門する。
1854	安政元	29	入牢中の松陰に金品を差し入れする。
1859	安政6	34	萩・西洋学所入塾、兵学を修む。
1860	万延元	35	克己堂学頭から助教となる。
1861	文久元	36	克己堂学政となる。
1862	文久2	37	高杉晋作らと英公使館焼き討ちを起こす。
1863	文久3	38	吉田松陰の遺骨を改葬する。 高杉晋作が奇兵隊を結成する。 小介奇兵隊に入隊する(参謀)。 小介土屋となる。
1864	元治元	39	馬関戦争へ出陣する。 小介奇兵隊の狙撃教官となる。 小介事故で右眼を失い独眼竜となる。 高杉晋作が功山寺にて挙兵する。
1865	慶応元	40	光市室積に南奇兵隊を結成し、総督になる。 のち石城山に移り第二奇兵隊を結成する。
1866	慶応2	41	小介が山口へ出張中、立石孫一郎ら 約100名が脱退暴動事件を起こす。(4月) 四境の役・大島口の戦い始まる。(6月)
1867	慶応3	42	小介が萩の豪商から新式銃購入資金を 調達する。
1868	明治元	43	鳥羽・伏見の戦い。 北陸鎮撫東山道軍奇兵隊参謀となる。 小千谷会談に応接する。小介仁政を施す。 奇兵隊並びに諸隊凱旋が始まる。
1869	明治2	44	山縣有朋の後任として奇兵隊最後の 軍監となる。 奇兵隊・並びに諸隊さわぐ。(宮市集結す)
1870	明治3	45	小介、平生町田布路木へ移住する。
1872	明治5	47	妻ツチを迎える。
1884	明治17	59	従六位に叙する。
1891	明治24	66	精忠不朽の碑撰文(周防大島町久賀)
1900	明治33	75	従五位に叙する。
1902	明治35	77	死去。田布路木の村有地墓地に葬られる。
1907	明治40	—	山縣有朋が小介のための碑文作成 (建碑は大正頃)

広域
地図

平生町

詳細
地図

顕彰碑へのアクセス

○JR柳井駅から防長バス

「周東病院前」で下車(約10分)

顕彰碑徒歩3分、

飯山塾跡徒歩10分

○山陽自動車道

玖珂ICから30分

熊毛ICから30分

※駐車場は宇佐木地域交流センターをご利用ください。

(顕彰碑まで徒歩15分、塾跡まで徒歩10分)

書籍のご案内

「明治維新の志士 白井小介」 価格1,000円

販売所及び関連施設

平生町教育委員会

〒742-1102 山口県熊毛郡平生町大字平生村178

TEL 0820-56-6083

平生町立平生図書館

〒742-1101 山口県熊毛郡平生町大字平生町193-4

TEL 0820-56-2310

平生町歴史民俗資料館

〒742-1101 山口県熊毛郡平生町大字平生町193-4

TEL 0820-56-2310(平生図書館からつながります)

明治維新の志士



白井小介



○白井小介(小助・素行・飯山)

小介は、文政9年(1826年)儒学者白井弥蔵の長男として萩に生まれました。明治維新の志士で、短槍の名人、鉄砲の権威者であり周南の独眼竜とうたわれました。

吉田松陰が江戸に収監された際には、金品を差し入れ、松陰死後は、高杉晋作らとともに尊攘運動に奔走、第一奇兵隊の参謀や南奇兵隊の総督を務め、四境の役・大島口の戦いや戊辰戦争では、数々の武勲をたてました。

明治3年には、平生町田布路木に隠棲し、飯山塾を開いて子弟の教育にあたり、明治33年には、従五位に叙せられ、明治35年77歳の生涯を終えました。

① 顕彰碑

平生町田布路木峠 頂上付近



白井小介の功績を解説しています。



明治40年10月 山縣有朋撰文

白井小介 関連マップ (田布路木周辺)



② 飯山塾跡



維新後、小介はこの地に移住し、子弟の指導にあたりました。

白井小介数々の逸話

名刀を売って吉田松陰を助ける

小介は、嘉永・安政の頃江戸に遊学し、安積良斎、鳥山新三郎に文学、佐久間象山に砲術、斉藤新太郎に剣術を学び、吉田松陰とも親交がありました。その頃、吉田松陰が禁をおかして海外渡航しようとして幕吏にとらわれ、江戸伝馬町の獄に入れられていました。

当時、獄に入る者は牢番や牢頭に賄賂を贈る習慣がありました。同じ獄中の囚人たちに新人りの挨拶として渡す礼金のようなものです。いきなり下田から連れられてきた松陰には、その金がありません。これを聞いた小介は、差し入れの金策のため、父からもらった自慢の長船祐定の名刀を売って、金品を贈り松陰の急場を救ったことで知られています。「刀は二本もいらぬ。鉄砲が二丁あれば十分だ。」

と笑ったといわれています。しかし、さすがに外見をはばかり、その後も二本差していました。長い方は木刀であったそうです。

差し入れをしたため小介は幕府から罪を問われ、主家に呼びもどされ拘禁ということになりました。後に松陰が在所蟄居を申し付けられ、萩野山獄に入った頃、小介も銀十五匁の過料にて拘禁を免ぜられました。

雷管破裂事故により「右眼失明独眼竜」となる

小介はかねてから願望の、小銃の射撃教官となりました。訓練に熱が入るのも当然です。射撃中雷管が暴発して、彼の右眼に金属片がとびこみました。(射った弾丸が前の木か何かに当りはね返って右眼に入ったという説もあります)眼を負傷後、船で阿月の青木の彼の自宅に帰りました。

自宅では姉のエイが献身的な看病につとめました。小介は痛みを苦しみましたが、快癒まで百日を要したといわれています。光線が目に入ると痛みがひどくなるため、光をさえぎる布幕も、姉のエイは木綿布を絹地の布に変えてみたり、又全快の願かけもしたことで知られています。

小介が治療を終えた時には、かつての教え子の赤根武人(あかねたけ)や世良修藏(せらしゅうざう)などは立派な役職についていました。「この怪我がなかったら」と思うのは小介ばかりではなく、彼を知る者はひとしく惜しまれたようです。以後彼は独眼となり、伊達政宗(だてまさむね)にあやかり「周南の独眼竜」白井小介と呼ばれるようになったそうです。